
さよならを一発

蒼井ぴあの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならを一発

【Nコード】

N1311C

【作者名】

蒼井ぴあの

【あらすじ】

大切な人がいるのに、好きな人がいるのに、どうしてこうも心を揺さぶる人がいるのだろう。

理子が好きだ。

この想いは絶対に嘘じゃない。

だけど、

どうしてこんなにもあの女は心を揺さぶり、

俺の中に居座り続けるのだろうか…。

小松 藍、という女……。

細くて、小さい体で誰よりも力強く働き回る女。

正直いってタイプではない。

少し抜けてて、天然バカなタイプが俺は好きだ。

デキる女と仕事をするのは、一秒たりとも気が休まらない。

だから藍と組んで仕事をするのは嫌だった。しかし、パートナーとしてはフォローもうまいし、気もきくし、何より頭が切れる。

最高にいい仕事をするから、こいつが男だったら仲良くしたいとか何回も思ったことがある。

ただ一回だけ、

仕事の接待で二人ともやたら吞まされて、

藍はあまり酔わないタイプなのに、その日はなぜか酷かったため、どうしようもなくタクシーで送って帰った。

藍は一人では全くといっていいほど歩けなくなっていて、

おんぶして部屋に行き、置いて帰ろうとした時、

「ごめんね…ごめんね…アナタのこと好きになっちゃった…」

突然、俺を見て泣き出した。

その姿が小動物のようで守ってあげたくなっても俺の頭には理子が浮かんで、

「ごめん。」

と言って立ち去った。

次の日からまた仕事は普通にあつて、藍と会うのが辛かったが、藍は何もなかったかのように過ごしていた。

酒で記憶が飛んでいる。

そう思って俺も普通に接していた。

だけど、あの日のあの顔、あの声、あの香りは俺を離してはくれなかった。

俺は接待のあと、この日はそんなに酔ってはいなかった藍を引っ張って家につれて帰り、押し倒してしまった。最初は抵抗していたが、

「…っ好きなのっ…」

と言って、俺を求めてきた。

俺らは飽くなく抱き合い、付き合うことになった。

しかし、俺は理子との関係も切れずに続けてしまっていた。

そんなある日、理子はニコニコと笑って

「赤ちゃんデキちゃったの。3ヶ月だって。」

と告げてきた。

俺は頭が真っ白になった。

「産んでもイイ？」

理子は下から不安そうに俺を覗いた。

俺はこういっしかなかった。

「ああ。結婚しよう。」

今度は頭の中には藍の顔しか浮かばなかった。

理子を送って帰った後、藍に電話をかけて会う約束をした。

待ち合わせ場所にやってきた藍は、

「突然何よ……」

と言いながら、眩しく微笑んだ。

その眼を一瞬で逸らしてしまった。

「ごめん。俺二股かけてた。」

藍の眼は瞬時に濁った。

「別れ…たいの?」

俺は頷きながら告げる。

「子供ができたんだ…」

藍は放心した。取り乱すことはなかった。

「…彼女がいることは知ってた。でもそれでもよかったの……」

ねえ…一発殴らせて?」

涙をその瞳からこぼしながら言った。

「眼を瞑って。」

俺は言われた通りにした。それくらいは当たり前だと思った。

足音が近づいてきて、俺は歯を食いしばった。

ちゅ………

耳元で「バイバイ」と告げて、藍の足音は消えていった。

「痛ってー…」

俺は頬を押さえて、その場にしゃがみ込んだ。

(後書き)

よろしかったら評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1311c/>

さよならを一発

2010年12月3日14時18分発行